「イワン・クパーラ」の夕べに思ったこと

安部　花子

7月10日に三戸浜海岸で行われた、イワン・クパーラ（ロシアの夏至祭り）に参加させていただきました安部花子と申します。みんなでバーベキューを楽しんだ後、浜辺でロシアの夏至祭を再現する行事でしたが、とても楽しかったです。

顔見知りがほぼいない状況の中一人での参加だったため、最初はどのような会になるのか全く想像がつかず、もしかしたら１人でぽつんとすることになるかもしれないけれど、まあいいか、海岸沿いを散歩するのも悪くないし、という気持ちの中で参加しましたが、運営の方のサポートや、すでに顔見知り同士の参加者の方々も皆フレンドリーに接して下さったことで、最初から最後までとても楽しく過ごすことができました。私以外にも１人で参加している方が数人いましたが、私と同じような気持ちだったと思います。さまざまな年代・性別・異なるバックボーンを持つ人たちが交流している様子は、まるでチェブラーシカにでてくる「友達の家」のようだと思いました。

各々が現地集合で集まりましたが、まず取り掛かったのは食事の支度。あらかじめ用意してある大量の食糧・道具を手際よくさばいていく運営・海の家のスタッフの方たち。水着や釣り道具を持ってきている人たちは海で泳いで遊んだり、釣りをしたり。手ぶらで来た人たちも、さざ波の音を聞きながら日陰でおしゃべりをしたり。とにかく各々がのんびりマイペースに過ごしていて、ゆる～くまったりとしていたのがとても印象的でした。私も手ぶらで来ましたが、足元だけ潮水につけながら参加者同士で浜辺を散歩したり、シャシリク用のお肉とジャガイモをひたすらみんなでクシに突き刺していく作業が面白かったです。食事がひと段落すると、見晴らしの良い湾曲した浜辺一帯を夕日が朱く染めます。漁協の方に迷惑をかけないよう、小さな小さな焚火を燃やし、女性は花冠を頭につけて、みんなでロシアの民謡を歌いながら、焚火のまわりをぐるぐるまわって踊ったり、炎の上を飛び越えたりしました。最後に、遠くにくっきりと富士山をのぞむ三戸浜の海へ、花冠を放ちます。当日はちょうど地元のお祭りもやっていて、お囃子や太鼓の音を聞きながら、花冠が沖の彼方に消えていくのを見送るというのは、なんだか日本とロシアの文化が融合しているようなひとときで、とても感慨深くロマンチックなものになりました。

高校時代からここ10年、ロシアの雑貨や料理、文化にとても魅力を感じていましたが、大学の学部や現在の仕事内容もロシアとは全く無関係の分野に身を置いてきたので、日本国内に居ながらその興味の対象にどうやってアクセスして良いか分からずにいました。たまたま近所のロシア料理屋さんでマトリョーシカの絵付け体験教室の案内を見つけて参加し、そこでご一緒したのが千葉常任理事・菅野エレーナ先生との出会いでした。幸い私は協会関係者の方との出会いを通じてこのような機会に恵まれましたが、以前の私のように、ロシア文化に興味を持っていながら、触れるきっかけが分からずにいる人はまだまだ大勢いると思います。ぜひ貴協会にはこれからも楽しいイベントをたくさん企画していただき、迷えるロシア大好きっ子たちに交流の場を与えていっていただければ幸いです。